

卵肉兼用種（岡崎おうはん）に対する飼料米の給与

○山西真樹¹・稲生哲¹・宮田透²・太田勝美¹・浅井文吾¹・井出歩¹・筒井真理子¹
（¹家畜改良セ岡崎・²農林水産省）

〔目的〕飼料原料の多くを輸入に頼る我が国の養鶏分野において、飼料米の利用は飼料の安定供給、自給率向上等の面から期待が大きく、実際、卵用鶏や肉用鶏について配合飼料中のトウモロコシの代替品や、配合飼料自体の一部置換品として飼料米を利用する試みが実施されている。今回、独立行政法人家畜改良センター岡崎牧場が作出した卵肉兼用種「岡崎おうはん」に対して飼料米を給与し、その産卵性能、産肉性能等に及ぼす影響を調査した。〔方法〕岡崎おうはん（雌 156羽）を3区（各区2反復）に分け、それぞれ市販の成鶏用飼料（CP:17~18%、ME:2,830~2,850kcal/kg）に対し飼料米（玄米）を0%（対照区）、20%及び50%となるように置換した飼料（20%区及び50%区の飼料にはカルシウムとプレミックスを添加）で給与試験した。供試鶏については、体重、産卵性能（産卵率、卵質）、産肉性能（0%区、20%区のみ）

及び飼料摂取量を調査した。試験期間は208日齢から380日齢（50%区）もしくは500日齢（0%区及び20%区：岡崎おうはんの標準的な飼養期間）とした。〔結果〕体重：試験開始10週（37週齢）以後、対照区が20%区、50%区を上回った。産卵性能：50%区は20%区や対照区と比較して産卵率が低く、卵重が小さかった。また、20%区及び50%区は対照区と比較して卵黄色が薄い傾向にあった。産肉性能：飼料米給与による悪影響（ムネ肉、モモ肉割合の減少等）は認められなかった。飼料摂取量：50%区は20%区や対照区と比較して飼料摂取量が少なかった。試験開始18週（45週齢）前後までは20%区が対照区を上回る傾向にあったが、その後、同程度となった。以上の結果より、卵肉兼用種「岡崎おうはん」に給与する成鶏飼料の20%を飼料米（玄米）で一定期間、置き換えても特段の支障が認められないことが明らかとなった。

卵肉兼用種（岡崎おうはん）に対する飼料米の給与

○山西真樹¹・稲生哲¹・宮田透²・太田勝美¹・浅井文吾¹・井出歩¹・筒井真理子¹

（¹家畜改良セ岡崎・²農林水産省）

演題希望分類：飼料・栄養

（遺伝・育種、繁殖、生理、疾病、飼料・栄養、経営・管理・畜産物利用、より選択する。）

優秀発表賞の対象者：

（講演者が発表時点で学生あるいは満30歳以下の場合は、◎印を付ける。）